
ある研究者の日記

星桜なつき。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある研究者の日記

【Nコード】

N4362F

【作者名】

星桜なつき。

【あらすじ】

特別講師として赴任した魔法学校で、一人の女の子と出逢った。彼女との邂逅から、私の未来が変わっていく。

6月のこと（前書き）

ラグナロクオンラインのファンフィクション小説です。作品を知らなくても読めるように書いたつもりですが、作品を知っているとわかりやすいかと思います。また、少々過激かと思われる演出もありますので、そのような演出が苦手な方はご遠慮ください。

6月のこと

6月1日

新しい出来事が始まるこの機に、日記を書くことにした。自分がこれから何をしていくか、何が起こったか——いろんなことを書き留めていきたいと思う。

さて、初めて書く今日は何のことを書くことにしようか。
真新しいノートを見るとわくわくしてくるな。

明日から私はどうやら学校の先生になるようだ。ここゲフェンの魔法学校で。先生の資格なんかあるわけないので、担任ということではないが、なんだかたいそうな名前で、特別講師と言う肩書きらしい。なんて自分に不釣り合いなのだろう。可笑しくなる。

特別講師、なんて名前を想像すると、ある分野での博識をつけた立派な人で、その知識を広め、教える。そんな神聖な職業と出てくる。

それがこの私だというのだ。どこをどう見たらそう見えるのだろう。風采もぱつとしないだろうし、口下手だし。人前に出ることも苦手だし。そんな専門的な知識、私が深く持つてゐるはずがない。

そもそも私が先生なんて呼ばれること自体、そんなことあるわけないと思っていた。

歳も20を少し越えたくらいだし、教えるというよりも教わりたいたことがまだまだある。確かに本が好きで、いろんな本を読んだりして、研究みたいなまねごとをしてはいたが、そのことを人に教えるなんてとてもできるとは思えない。

でも、他に何か仕事って言われても、私に出来ることが他に何も

ないかもしれない。体力はないし、冒険者でもない。何も思いつくことがない。

今までずっと本ばかり読んでいた私に、できそうな仕事がないものだから、この特別講師を引き受けることにしたのだ。なるべくなら、人前に出ることはしたくないのだが。それに先生と呼ばれるような仕事だなんて……。

ああ、本を読んでいるだけでお金が入ってくれば、こんなに悩むことなんて無いのに。生きていくって、辛いことだな。

先生、か。私に勤めることが出来るのだろうか。

ここまで書いて、私は明日からのことになんかなり緊張していることがわかった。

文章も変だし、ネガティブなことばかり書き連なれてる。だめだ。せっかくの最初の日記なのにこんなことばかり考えては。うだうだ変なことを考えず、明日からの出来事に身を任せたほうがよさそうだ。明日には明日の風が吹く、とも言うし。なるようになるさ。

今日はここまでにしよう。

6月2日

安心した。

緊張していたのは私だけじゃなかったんだ。

それはそうだ。私も生徒だったら、どんな先生が来るのかとわくわくするだろう。

扉に黒板消しとか挟んだりして、どんな反応するのかなとか。そんないたずらをしていたことを思い出す。

……ばれてしまったが。

「私は魔物研究の特別講師で、冒険者が知っておかねばならない魔物についての勉強をみんなとしていく。どうぞよろしく」

我ながらなんのひねりもない台詞だな。今になって後悔する。色々気の利いたこととか考えてはいたが、壇上に立つたらみんな忘れてしまった。生徒の視線が全て私に集中するのを感じたら、頭がからっぽになって何も言えなくなってしまった。でも、しどろもどろな私に生徒の受けはよかったみたいだ。多分、顔、赤くなっていたし。ああ、恥ずかしいな。

生徒は10人で、男の子5人、女の子5人。全員15〜18歳くらい。職もまばらだ。

名前は、えっと。自己紹介のときで……。

あの元気がいいマジシャンの男の子がラウレル。私にしつこく質問をしていたな。それをたしなめていたのはシーフの女の子、トリス。その二人の幼馴染と言うアーチャーがカヴァクで……。

何も話さなかったけど、一番後ろの席で一生懸命私の方を見ていた瞳が印象に残ってる、ウィザードの女の子がカトリーヌ。

他の生徒は……、さすがにまだ顔と名前があまり一致しないな。全員、早く憶えるようにしないと。

でもお決まりとはいえ、彼女はいるのか、ギルドに入っているのか、レベルは幾つなのかとか聞かれても困る。はぐらかしたが、みんなにはばれねえだろうな。

私は冒険者ではないからレベルもないしギルドには入れないし、彼女なんて未実装だ！ 本ばかり読んでいたからもてないよ！

はあ。でも。彼女か。彼女、ほしいなあ。そばにかわいい女の子が居てくれたら、ほんといいよなあ。

何を書いているんだ、私は。

まあこんな日記なんて誰も見ないだろうし、いいか。

6月9日

気がついたら学校に来てから一週間が過ぎてしまっていた。忙しくて日記がかけなかった。3日も持たないとは。我ながら情けなく思ふな。

まあ、色々憶えることたくさんだし、なれないことをして疲れてしまったから、家に帰ったらすぐに寝てしまっていたからだ。言い訳か！

もうあまり日記のことは気にしないで、思い立ったときだけ書くことにしよう。

さて、今日は面白いことがあったな。忘れないうちに書き留めておくことにしよう。

カトリーヌ「ケイロン」

「魔物にたやすく打ち勝つには、その魔物のことを知ることが大切だ。つまり、弱点を狙うわけだ。魔物には属性と種族があつて、それぞれに弱点があつて……」

きーんこーんかーんこーん。

「ん、もう終わりか。今日はここまでだな」

「先生ありがとうございます！」

「それじゃ、また明日な」

「はい」

今日の講義もこれで終わりだ。だいぶ私も先生らしくなってきたのかな。

皆が先生、先生と言ってくれることがなんだか嬉しい。自覚つてこういうところから出てくるのだろうか。名前負けしないようにもつとがんばらないとな。

「……先生」

廊下を歩いていたら後ろから声をかけられた気がした。その声は小さくて一瞬空耳かと疑った。

振り向くと、そこには、ウィザードのカトリーヌがいた。

「カトリーヌじゃないか。どうしたんだ？」

問いかけたが、カトリーヌは次の言葉を言わず、じっと私を見つめている。見あげる緑色の瞳の中に、私の姿が映っていた。

近くで見るとこの子の肩に届くくらいの亜麻色の髪は結構ぼさぼ

さで、着ているワイザードの服もマントも少し綻びがあつて汚れていた。

そういえばこの子は、他の皆と仲良くしている姿を見たことがない。いつも一人でぼつんと席に座つて。いつの間にか居て、いつの間にか居なくなっている。声を聞いたのも初めてかもしれない。何も言わず、私の講義もじーっと私を見つめているだけ。一番後ろの席なのに、いつも視線は彼女とぶつかっていた。目立つことはまったく無いのだけれど、なぜかすごく存在感がある。そんな女の子だ。そんなカトリーヌのことを気にはしていたけれど、彼女のほうから声をかけてくるなんて。この機にこの女の子と、色々話してみたい。

「カトリーヌ？」

しかし、しばらく経つても彼女のほうから次の言葉が出てこなかった。何かを言い出しそうな表情で、手をじっと胸に抱いて、私を見つめていた。

なんだか仔犬みたいな女の子だな。

不思議がつて綺麗な緑色の瞳を見ると、小さな唇が動いた。

「……お昼」

かすかに聞こえるような小さい声で、そう言つたような気がした。
「お昼？」

視線はそのままで頭が縦に何度か動く。頷いているようだ。

お昼？ ……ご飯のことかな。

確かにこれから昼食ではあるが、どうしたいのだろう。私とご飯を一緒に食べたい、ということなのだろうか。

「そうか、お昼ご飯か。一緒に食べるか？」

「」

こくこくと頷いた。あつていたようだ。

「でも、私は自宅に帰つてお昼を作つて食べるのだが……それでも

いいか？」

私の問いにこくこくと頷く。

「それじゃ、うちに来るか？　たいしたものないけど、何か作ってあげるか？」

目をキラキラさせて、嬉しそうな表情になってこくこくと頷いた。しつぽがあつたらふりふりさせているに違いない。

よかった。これでカトリーヌと何か話ができるかもしれない。

私の住んでいる家にカトリーヌを案内する。

魔法学校からそんなに遠くないゲフェンの北の隅にある私の家。

ゲフェンに移ってから１年くらいになるかな。

研究に使ったり、自分で楽しんだりする為の本が所狭しと置かれていたりしている物置のような小さな家だ。

それにしても、自分の家に女の子を連れてくることがあるなんて思いもしなかった。

まあ、カトリーヌは生徒だから変な気は起こさないと思うけど。

「ちょっと片付いていないし、狭いかもだが、くつろいでくれ」

「……本、たくさん」

部屋の一室は壁の周りがほぼ全部本棚で、そこに入りきれない本は机の上やら床やらに無造作に置かれている。それをカトリーヌは珍しそうに見ていた。

「ああ、お昼作るまで好きな本を読んでいて良いぞ。お気に召すものがあつたらだけど」

「わたしも、本、好き……」

そうつぶやいているんな本を手にとっていた。

喜んでくれているようだ。

「それじゃ、まっけてな」

こくこく。

カトリーヌは私がいつも読んでいる机に向かって、一冊の本を読

み始めた。

本、好きなのか。近頃の女の子としては珍しいな。古書や専門書の他に面白い小説とかも色々あるから、楽しんでくれれば良いが。そんなカトリーヌを横目に、私は台所に向かい、食材を探し始めた。

今日は何を作ろう。

昼食だから簡単なところで『クリームサンドイッチ』と『ハーブ蜂蜜茶』にしておくか。

女の子はどんな料理が喜ぶのだろう。手馴れていない私の作る料理でいいのだろうか。

カトリーヌはおいしいと言ってくれば良いが。

それにしても、女の子を私の家に連れてきて、私の料理を振舞うことになるうとは。

部屋汚くて幻滅してないだろうか。変な本とか見つけ出されたりしないだろうか。ああ、掃除とかももっとちゃんとしておくんだっ

た。

生徒とはいえ、女の子が家にいるってことで、やっぱり緊張しているな。変なことばかり考えてドキドキしている。

いけないな。学校の先生なのに。生徒にこんなことを思っている

は。

そんなことを思いながらも、料理は無事出来た。

女の子が食べられる量もわからなかったので、私の食べる量を二つ分。綺麗に出来たほうをカトリーヌにと。

「カトリー。できたぞ」

「！」

本を置き、嬉しそうに駆け寄ってくる。

ほんと、仔犬みたいな女の子だな。

「……おいしそう」

「好きなだけ、食べて良いぞ」

「」

私の前の椅子に座り、両手でパンを持って勢いよくはぐはぐと小さな口で啜えた。

幸せそうににこにこして。

なんだか、暖かい気持ちに包まれた。

そういえば、今カトリヌのことをカトリと呼んでしまったな。気づいていないのだろうか。

「カトリヌ」

「？」

瞳だけ、私に向ける。

「今度から、カトリって呼んで良いか？」

変わらない表情で頭だけが縦に動く。

ニツクネームで言えると生徒に近づける気がして、嬉しかった。

「そんなに勢いよく食べたらだめだぞ。よく噛んで」

こくこくと啜えたパンをそのままに頭だけ縦に動く。よつぽおなかですいていたのだろう。小さな口で一息懸命パンをかじっている。私の作った料理、お気に召してもらえたようでよかった。

そんな、おいしそうに食べているカトリを見ていて、私は、この娘は普段どんな生活をしているのだろうかと疑問に思った。

服は少し汚れていて、髪がぼさぼさで。正直同じくらいの年齢の女の子とは違う感じを受ける。他の学校の女の子は化粧をしている娘もいるくらいで、見た目を結構気にしているものだが。この娘はそんなお洒落とかに興味がないのだろうか。

カトリは、瞳が大きくて睫毛が長く、鼻筋もすらっとしている。口が小さくて、色白で、顔が小さくて。丸顔のとても端整な顔立ちだ。ちよつとだけ幼さを残したようなあどけない美人で……。簡単に言うと、かわいい。それも、ものすごく。とびきり。そんな女の子なのに。

うつ。でも、変な気は起こさないぞ！ 私は、先生だ。

そういえば、色々な経験をつんで転職できる上級職は、私の講義に出ている生徒の中ではこのウィザードのカトリだけだ。

私の講義は上級職になるための講義であることがほとんどだ。ウィザードなら私のしている講義の知識は持っていないとなれないはず。何故私の講義に来ているのだろう。カトリにとって私の講義は退屈にならないのだろうか。

この女の子のことに、興味が出てきた。不思議なことに興味を持つのは研究者としての悪い癖なのだろうか。

「……おかわり」

「えっ？」

気がつくともテーブルの上には白いお皿だけ綺麗に並べられていた。私の料理もすっかりなくなっていた。

「全部、食べたのか？」

こくこく。

いつの間に、食べたんだろう。カトリを見つめていたけど気がつかなかった。

「私の分もあったから、結構量があったと思うのだが、まだ食べたのか？」

こくこく。

よく食べる女の子なんだな。

「ちよつと時間がかかるがいいか？」

こくこく。

私は苦笑いして再び台所に向かっていった。

しかし、この日、私の家の備蓄していた食料が全て無くなってしまふことになるうとは、夢にも思わなかった。

日常のこと

最近知ったのだが、外では私のことを魔物研究の第一人者と思われるようだ。特別講師という肩書きでさえ身分不相応なのに。

古代のいろんな本から魔物を研究して、それを論文にしたり、研究の成果をブロンテラ王宮等に送ったり。そうした研究は、私の好奇心みたいなもの、まあ、本に書いてあることが本当かどうかを確かめたかっただけなのだが——それを解明したいと思い、解明したことをみなに知らせたいと思ったことから始めていた。

それで、私の研究が評価され、報酬とか頂くようになり、これまでの生活が出来ていた。

自覚はまったく無いが、こんなことがあり、魔物研究の第一人者と謳われるようになったらしい。

魔物研究の第一人者様なら特別講師をぜひ、ということ、こうして、先生にと呼ばれたのだ。

まったく、これだけ聞いたらたいそうな人みたいだ。ここにいる私はこんなみすばらしい人間なのに。

ただ、最近は研究を少し違う方向にしたいくなって、今までのように世間に出すということやめてしまっていた。この研究は誰にも知られたくないと思う。

それは、簡単に結論が出る研究でもなく、一人だけで、生涯をかけて研究し続け——いつかその研究が実を結ぶ。ありていに言えば、夢みたいなもの、かな。

私にだって、そんなことの一つはあっても良いはずだ。

それに、倫理の道も半ば外れそうな研究でもあることだし。

だから、仕事を探していた。古代の文献が多数残っているこのゲフェンで、この研究を完成させるために。

「……このように、過去にも不老不死への研究は進められてきた。しかしその数だけ失敗は繰り返された。不老不死の生物はいないのだ。しかし私はここに一つの可能性を見出すことができた。願わくばこの可能性を人としての倫理の道から背くことのない人に利用されることを……」

特別講師とはいっても、休日はある。休日にはこうして古代の文献をあさって読みふけ、研究にあけくれるのが私の今までの日課だった。

書斎の机で本を読む。時間も忘れて、いろんな本が私に問いかけてくる。疑問に思ったことを研究して私の好奇心を埋めていく。そんなことが今までの私の幸せであり、日常だった。

ふと、何かの気配を感じ、本から視点をはずすと、その先に見知った顔を見つけた。

いつの間に入ってきたのだろう。

そこにいた女の子は思いつめたような顔をし、私に何かを訴えていた。

「どうしたんだ？」

本に栞をはさみ、彼女に目をやる。彼女は人懐っこい仔犬のようにちよこちよこ私に近寄り、机の上に手をちよこんと乗せ、うるうるとした瞳で私を見上げる。

「カトリ？」

こうして綺麗な緑色の瞳で私を見つめられると鼓動が早くなる。

本当、この娘は……。

「……おなかすいた」

言うことがもう少し違っていたら嬉しかったのだが。時計を見ると、お昼前の時刻を指している。

「あ、そうか。もうお昼なんだな」

こくこく。

「よし、それじゃ何か作ってあげるから、そこで何か読んで待ってな」

「」

目をキラキラさせながら髪がはねる。よっぽどおなががすいていたのだろう。

カトリが何かの本を開くのを肩越しに、私は台所へと向かった。

こんな毎日が続いていた。

講義が終わるとカトリは私の家にご飯を食べに来る。

学校が休みのときは、ご飯時になるとこうして時々家に来る。

生徒の一人と特別に仲が良くなるということはあまりよくないこととは思っていたが、このカトリは少々他の生徒とは違った環境にいるらしい。

カトリと話をするたび少しずつ彼女のことがわかってきた。無口なカトリから聞きだすのに私の食費はとんでもないことになっていたが。

物心ついたときにはもう親がいなかったこと。私の家の近くに彼女は一人で住んでいるらしい。いつもおなががすいて仕方が無いから、冒険者として魔物を倒すことで食費などをまかなっていたら、いつしかウィザードになっていたとか。それで、本を読むなどの勉強ができなかったから私の講義に出て勉強してみることにしたとか……。

今まで、頼れる人、両親や兄弟、親類などの肉親、友人などがいなかったらしいのだ。ずっと一人で何でもやってきたらしい。

そんな話を聞いた事で、私はこの女の子をほうっておくことができないうでいた。

別な淡い暖かな感情も抱きながら。

台所に立ち、食材をあさる。料理は自分だけで食べるのなら面倒ではあったし、上手くも無かったが、カトリが食べにきてくれるようになって料理を作ることが楽しくなってきた。おいしく作りたいと思うし、カトリにいろんな料理を作ってみたいと思う。

はぐはぐとおいしそうに私の作った料理を食べているカトリ。

今、私は研究をしていない。それは、新しく幸せだと思えることが出来たからだ。

この女の子、『カトリヌ』ケイロン』のこと。

こうしているカトリを見ていることが、たまらない幸せに思えてならなかった。

食器を片付けて、本を読みながらくつろいでいるカトリを見ていたら、ふと思い立つことができた。

「おなか一杯になったことだし、どうだカトリ。ちょっとお洒落してみないか？」

こんなに綺麗でかわいい女の子が、自分を輝かせないのはもったいなさ過ぎる。

「……おしゃれ？」

本から目を離し、私の方を見つめる。やっぱり、カトリはかわいいと思う。

「かわいい女の子なんだし、髪くらい梳かしたりしてな。どうだ？」
頬を赤らめて俯いた。恥ずかしいけど、してみたいなって感じがカトリの思案していること、少しづつだけ読めるようになった。
「それじゃ、ちょっと失礼して」

座っているカトリの後ろに回り、櫛で亜麻色の髪を少し梳かす。
お風呂とかはちゃんと入っているようで、梳かすたび彼女の髪が
いい香りがした。なんか、女の子の香りって、ドキドキしてくる
な。甘くて、優しくて。包み込まれるようで、とろんとしてきてし

まう。それも、こんなにかわいい女の子の香り……。

っと、そんなことを思っていたらだめだ。

「ちよつと髪が痛んでいるな。髪、そろえるくらいに少し切ったりして良いか？」

こくこく。

頭を上下させながら後ろにいる私に視線を動かす。

良いようだ。

少し癖のある髪ではあるが、ぼさぼさに見えるのはこうした痛んだ毛がはねているからだろう。

丁寧に鋏を入れてあげた。

ほどなく、少しの癖髪である為か、耳の横辺りの髪が少しはねて耳みたいになってしまった。そこだけでもまっすぐにならなくて、ふんわりはねている。

なんか、本当に仔犬みたいになっちゃったな。でも、カトリに似合ってかわいい。

「ほら、こんなにかわいくなった。カトリは元が良いんだから、他の女の子みたいにお洒落しても良いんだぞ」

カトリは渡した鏡をじっとみて前髪をいじっていた。気に入ってくれたのだろうか。

あとは、服、かな。

「カトリ、服ってそんなにもっていないのか？」

こくこく。

食費で服まで賄えたりは出来なかったのだろう。

「あーでも、私は女の子の服を持っていないしな……、そうだ、今度街に出て買いに行かないか？ いろんな服、たくさんの服、カトリが着るともつとかわいくなと思うぞ。そうだ、髪飾りとかもかわいいかもしれない。ここにリボンとかつけたりしてな。お洒落しよう、カトリ」

いろんな姿のカトリを想像する。どれも似合いそうで。とても輝くだろう。そんなカトリも見してみたい。

カトリは私をじつと見つめていた。何かを言いたいような表情で。

「どうしたんだ？」

「……先生」

「ん？」

「ありがとう」

顔を赤らめて、少し俯いて。私に言った。
私も、カトリに高鳴る鼓動を感じていた。
やっぱり、私は、この女の子に……。

カトリと魔法

7月3日

また、何日か過ぎてしまっていた。

それに、前回とかに日付を入れるのを忘れていた。

もう日記じゃないな。私の手記だな。でも、日記みたいにがんばって書こう。

だけど、多分、今までのように書くのはカトリのことばかりになるだろうけど。

さて、今日は何のことを書こうか。

そうだな。忘れないようにカトリの食べられる量について書いておこう。

カトリが一食で食べられる量は、大体、私の3日分の食料が目安だ。

なるべく献立は同じにしないでおくことを考えているが、色々考えるのって難しい。毎日同じようなのでは飽きるだろうし、いろんな美味しいものをカトリに食べさせてあげたい。

カトリは好き嫌いがほとんど無い。野菜も良く食べているし、肉や魚も大好きだ。でもやはり女の子なのか、甘いものが好きなのうだ。食後のデザートを欠かさずつけるようにしている。最大の問題は私の料理の腕前だけだな。

最近では、行きつけの八百屋さんとか魚屋さんとかと顔なじみになってしまった。毎日たくさん買ってるおかげで、おまけもたくさんつけてもらえるようになった。でも、いつもこれだけのものをカトリ一人で食べているって信じられないだろうな。

そういえば、カトリはどうしてこんなによく食べられるのだろう。身長は私の胸くらいで低くて、とても華奢で、腕や足は細い。腰なんか抱いたら折れてしまいそうなほどだ。

出ているところ……胸は、こぼれそうなくらい大きい。服もカトリの胸では苦しそうだ。正直スタイルは抜群だろう。女性の体のこれほどまでの見事なプロポーションを私は見たことが無い。

かわいくて、スタイル抜群で。豊満な胸……ってどこを見ているんだ私は。いいんだ。私も男だ！

しかし、この娘は一日で自分の体重くらい食べているんじゃないだろうか。

朝昼晩の三食だけじゃなく、間食もしているくらいだし……。

人によっては胃腸の調子がよくて、たくさん食べられる人もいるそうだが、研究者としての悪い癖か、何か理由を知りたくなる性というか、好奇心というものが出てきてしまう。

人の体についてはあまり詳しくないが、たくさん食べられる人は、たくさん食べた後でも『おなかがすいた』とは言わないはずだ。どんな人にも許容量があるはずだし、それを超えそうになるまで食べたら消化する為に時間が必要になるはず。

つまり、おなかいっぱいになったら、割と次の食事まで我慢できるはずだ。人間の身体とはそういうように出来ていると思う。私がそうだし。

しかし、カトリの場合、おなかがすいたと言い、食事を取った後でも間食をすることがある。さすがに少し減るが食事で食べた量くらいな量をだ。おなかがすいたとき、食べないと元気が出てこなくて、動けなくなるらしい。だるくなるとか、そんなことを言っていた。

まるで、他の何かに体のエネルギーを使ってしまった為に、無理にでも食べなければならなくなっている。そんな感じさえ受ける。

何か他のエネルギー？

もし、そうだとしたら、彼女の体にはかなりの無理がかかってい

るかもしれない。無理に大量の食べ物 소화し、エネルギーを無理に作り出す。だから、こんなに食べてもカトリは華奢なのかもしれない。もし、これだけ食べなかったら、カトリは……。

私の心の中に、不安が広がっていく。

確かめなければ。

今日もまた、食事時になるとうちに食べに来てくれるカトリ。幸せそうに、おいしそうに、私の作った鮭のムニエルを小さな口でもぐもぐと啜っていた。

こうしているカトリを見るだけで私も幸せな気持ちになるけれど、不安が、私の脳裏を横切っていく。

「……おなかいっぱい」

綺麗になったお皿を前に満足そうな顔で私を見つめてくる。

「そうか、おいしかったか？」

ぶんぶんと音がするくらい頭を上下にさせて。

「そうか、それはよかった」

そんなカトリの仕草を見て、居ても立ってもいらなくなる。そうだ。

「なあ、カトリ。魔法ってどうやって使ってる？」

食器を片付けて、食後の紅茶をのんびり飲んでいるカトリにそう切り出してみた。

カトリはウィザードだが、魔法を使っている姿を今まで見たことが無い。機会がなかったということもあるが、この魔法というキーワードが私のこの不安を解かす力ギになるかもしれない。

「？」

「そうだな。ちょっと私に魔法を見せてくれないか？」

「……どうやって？」

「えっと、たしかここに……」

本棚の下の引き出しを探してみる。前、プロンテラの露店で売っていたものを研究材料として買ったものがあつたはずだ。

「あつたあつた。『古木の枝』。これを使って魔物を出してみるから、倒してみてくれ」

『古木の枝』とは、使うと魔物を呼び出すという少し危険な道具だ。どんな魔物が出てくるまでは使ったときにしかわからない。これで魔物を出して、カトリに魔法で仕留めてもらえれば。

「……危ない」

「そうだな。強い魔物が出てしまうと私も危ないかもだが。でも見てみたくてな。カトリが魔法を使っている姿」

ちよつと不安そうな表情のカトリだったが、こくこくと頭が縦に動いた。

「そうか、やってくれるか」

私の、この不安をなくして欲しい。

ゲフェンの北から街を出て、あたりに誰もいないことを確認する。誰かがいて、古木の枝からの魔物に襲われたら大変だ。

「ここなら、誰の迷惑にもならないな。それじゃ、カトリ、頼むぞ」
なおも不安そうにしていたカトリだが、こくこくと頷いてくれた。カトリが言うように危ないのだが、カトリへの不安には代えられない。

持っていた枝を真ん中からぱきりと折った。

枝から紫色の煙が出て、折ったところが青く輝く。

キシヤー！

大きな本のような形のものが、何か不気味な声を出しながら私の頭に飛んできた。

魔物『ライドワード』だ。

私の頭にまとわりつき、本が開いたり閉じたりするように、本のページに生えている牙のようなとげとげで、がぶがぶと私をかじってくる。

というか、痛い。めっさ痛い。

「……、カトリ、頼む」

カトリはそんな私を見て首を横にかしげていた。

冷静にしているけど、頭に牙が刺さっているから！ 死んじゃうくらい痛いから！ そんな不思議そうな顔して見ていないで！

カトリは腰のポケットから何か取り出して、私の足元に転がした。ブルージェムストーン？

「……セイフティウォール」

カトリは両手を広げ、魔法の詠唱をする。

私の足元に転がったジェムストーンが光り、地面に立つように四角い光の結界ができた。

「……こっち」

カトリに言われるように、結界内に飛び込む。

ライドワードは私にまたかじりつこうとするが、結界が私を守って、ライドワードを弾いている。

カトリを見ると、何か詠唱しているようだ。しかし、それも一瞬。

「……ユピテルサンダー」

カトリの指先から稲妻のような光が出てライドワードに当たる。

ばちばちと火花を散らし、吹き飛んでいく。

街壁にぶつかり、ばちばち輝いて、燃えて、落ちた。

「……いくら本が好きだからって言うてもだ。本に食べられて死ぬなんてまっぴらだ」

顔まで血が流れてる……。いたた。私はポーションを取り出し、傷口に塗る。死ななくて良かった。

「大丈夫？」

「カトリ、すまないな。やっぱりやるんじゃないかな」
心配げな表情で私を見てこくこくと頷く。

ライドワードが燃えて消えたところに、追憶のしおりが落ちていた。

私はそれを拾い、カトリに渡す。

「お礼だ。やっぱりカトリの魔法はすごいな。見せてくれてありがとう」

「しおり」

「また、本を読むとき、それを使うといいぞ。私もカトリが読める本がわかっていい」

「……ありがとう」

「さて、それじゃ、帰ろう。そうだ、何か作ってあげるか。魔法を使っておなかすいただろう？」

こくこく。

いつものように、カトリは頭を動かして。

私達は、いつもの私の家に、帰って。

またいつものように、私は料理を作ってあげるんだろう。

安堵

魔法の指南書などでは、以下のことが注意書きとしてある。

『魔法を使う者は、その魔力に身体を蝕まれ、力を奪われていくことがある』

基本、魔法というのは、詠唱を唱え、自然にあるエネルギーを自分の精神力を触媒にし、魔力に変換して、形にする。

炎であれ、風であれ、水であれ、全てはその流れだ。

精神力で全て賄えないような強力な魔法はジェムストーンなどを使う場合もある。

魔法は強力だ。剣や弓などの武器を必要としないで一瞬で魔物を倒せる力がある。

その為、使い方を間違えると自身に跳ね返ってくる――。

指南書などでは魔法使いがこうした力に犯され、命を落とすことがあることが明記され、注意を促している。

現在では、魔法学校等で正しい使い方等を徹底している為、そうした事故はもう過去のものという認識だ。

しかし、カトリは正しい魔法を教わって来たわけではない。すべて独学で魔法を使ってきたらしい。

カトリがそうだと思いたくはない。

しかし、カトリは魔法の詠唱が短すぎた。あの難しい上級魔法『ユピテルサンダー』もあつという間の詠唱だった。また、やはりとすべきか、魔法を使った後で、いつもの量を食べている。食事した後すぐにだ。

私はここで仮説を立ててみる。

魔法の使い方を知らない少女の頃のカトリがいた。あるとき、魔法のことを知る。その魔法を面白半分に使ったら、魔物を倒すことが出来た。そのとき、自然のエネルギーを使わず、自身の精神力のみで魔法を唱えてしまった為……、おなががすくようになった。なぜ、おなががすくのかということがわからず……魔法を使い続けて、たくさんのお食事を取るために。

この仮説が正しいとしたなら、もうあまりカトリに魔法を使わせるわけにはいかない。もしくは、ちゃんとした魔法のやり方を教えなければならぬだろう。そうでないと、カトリは、ずっと無理を……していき……。

「……おなかいっぱい。ありがとう」

食事を終えた頃。カトリのいつもの笑顔が消え、綺麗な細い眉をしかめ、真摯な瞳で私を見つめてきた。

「カトリ。どうかしたか？」

「……先生」

最初に声をかけられたときのような、か細く、小さな声。

「どうしたんだ？」

なおも見つめて。カトリに私の心の中まで見つめてられているような、そんな錯覚を覚える。

そんな目をして、どうしたのだろう。

「……どうして、私の魔法、見なくなったの？」

「えっ？」

カトリが、今までに無いような饒舌で驚いた。それに声も大きくて。カトリがこんな声を出せるなんて。

「先生、あんな危ない目にあってまで、どうして？ もっと違う方法もあったのに」

怒って、いるのか……？

そうか。カトリも不安なのかもしれない。

私があんなことになってまで、カトリの魔法を見せて欲しいと言

ったから、私が何を望んでいたか知りたいのだろう。

すまなかった。何も言わず、試すようなことをして。

「……カトリ、訊いてくれていいか？」

こくこく。

「私は、カトリの体のことが、心配になったんだ」

「……体が、心配？」

「そうだ。毎日たくさん料理を食べていて、体に負担にならないかって。それで、理由を知りたくなったんだ」

「……負担？」

「カトリも知っているかも知れないが、魔法を使うとき、使い方を間違えてしまったら、体に負担がかかり、最悪の場合死んでしまうことがあるんだ」

カトリは私をじつと見て、話を聞いてくれている。私は話を続けた。

「それで、もしかしたら、カトリは、魔法のそうしたことから、体に負担をかけていて、たくさん食べなければなくなっているのじゃないかって……。心配になった」

「……先生が、私のことを、心配してくれているの？」

「そうだ。カトリは私の大事な女の子だから、心配するに決まっている」

「え……」

「だから、私は、カトリがどのように魔法を使っているのかが知りたかった。それで、少し無茶をしたんだ。心配かけさせて、試すようなことまでして。本当にすまない」

「先生……」

カトリは俯いて、恥ずかしそうに指をもじもじさせていた。変なこと、言っちゃったかな。

でも、私は真面目に話を続けた。

「カトリ。魔法を使うとき、どんな感覚を感じてる？」

「感覚？」

「例えばだ……。魔法を使ったら、体のどこかの部分が吸い込まれそうに感じたり、急に走ったような息切れや動悸を感じるとか。そんな感覚、ないか？」

首を横に振る。

「そうか。何か普段とおかしなところ、ないか？」

こくこくといつものように頷く。

「そうか……」

「……先生には、言わなかったけど」

「え？」

「私、本当は、レベル、92……」

「えええっ！ 本当に?!」

こくこくと小さく恥ずかしそうに頷いた。

ちよつと待て。カトリのレベルが、92？ ということはだ、ということとは……。カトリはかなり熟練されたウィザードということになる。魔法アカデミーの先生をしていてもおかしくないほどだ。このくらいのレベルなら、天変地異を起こせる大魔法も使いこなせ、世界のどんな強い魔物とも対等に戦えるはずだ。宮廷の魔法使いでもやっていけるだろう。

カトリの歳は確か18歳と訊いた。その女の子が、そんな熟練の魔法使いだなんて。なんていう……。

道理で、あの難しい魔法の詠唱も、あんな短く容易く行っていたわけだ。

「カトリ、本当はすごい女の子だったんだな……」

「……びっくり、した？」

「でも、それなら、私の不安って、気にしなくてもいいんだな」

こくこくと頷くカトリを見て安堵の気持ちに包まれた。

よかった……。

カトリはただ、たくさん食べることが好きなだけな女の子だったんだな。

でも、そんなにレベルが高くなるまで、ずっと独りだったなんて。

「だけど、ごめんなさい……」

「ん？ 何がだ？」

「私、たくさん食べるから、先生に迷惑かけてたかも……」
俯いて、下を向く。

気にかけてしまったか。

私はカトリの頭にぽんと手を置いて、優しく撫でてあげた。

「私は、カトリがいつも私の作ってくれた料理をおいしそうに食べていること、見ているの、すごく幸せだ」

「え……？」

「嬉しそうなカトリの姿。すごくかわいくて……。だから、またいつでも食べに来ていいんだぞ。私はもつとおいしく料理を作って、カトリに満足させてやるから」

「先生……」

「だから、カトリ。私に遠慮するな。カトリが幸せなこと、笑顔をみせてくれること。それが私の幸せにもなるからな。遠慮なく頼っていいんだぞ。女の子がしたいおしゃれ、好きなことも私がなんでもしてやるからな。今まで出来なかったこと、全て」

私を見つめるカトリの瞳から光る粒がこぼれていた。

「先生、先生、先生……」

私に抱きついてくる。よほど、嬉しかったのだろう。

私も、ぎゅっと、カトリを抱きしめていた。

心と想い

7月15日

それから、カトリの食事は少しだけ、少なくなった。
カトリは前にもましてうちに来ることが多くなった。
それは、嬉しいことだけど、本当に幸せなんだけど、不安に思う
ことが無いことはない。

私もカトリと同じような境遇にいた。

物心付いたときには両親はもう居なくて。近くにあった本だけが
私の先生であり、友人だった。

幼い私にとって、いつもおなかをすかせていても、おなか一杯食
べられることが出来なくて。

やりたいこと、望んだこと、思うようにいかなくて切なくて。

そんな日々を過ごしていた。

そんな頃の私とカトリを重ね合わせてしまつて……。そんな思い
をさせたくない。

いつしかカトリのことを想うようになっている私がいる。

どんなときでもカトリの笑顔が心に浮かぶ。カトリを探してる。

姿が見えないときは寂しくて。そばに居てくれるときは安心して。

笑顔を見せてくれたら、たまらなく嬉しくて幸せな気持ちに包まれ
る。彼女の為なら、どんなことでもできる気がしてくる。

ずっとそばに居て欲しい。彼女の為ならなんでもしてあげたい。

暖かくてふんわりとしたあの女の子をまた優しく抱きしめたい…

…。

そんな、初めて私の心の中に宿る暖かな気持ち。

とても、不思議だ。

私自身のことなのに、私自身でも、わからない。私が私でなくなっていくような。

いつから、そう思うようになったのだろう。

いつのまにか、気がついたら、私の心の中に彼女がいる。

でも、それが、ずっと前からの約束事だったようで。決まっていた運命と考えるようで。ああ、上手い言葉が見つからない。

研究者としての私でも、わからないことはあるみたいだ。

カトリと言う魔法使いの女の子が、私を魔法にかけてしまったみたいだな。

でも。

カトリは、私のことをどう思ってくれているのだろう。

女の子の心の中の気持ちが知りたい。

いつものこんな毎日で、これでいいのかって、不安になる。

私の、何かしてあげたい、そばに居て欲しいって想うこと。もっともっと、カトリに幸せを感じて欲しいと想うこと。カトリにとって、迷惑だと感じたりはしないだろうか。

私の容姿は自信がないし、性格もかなりのんきだし。女の子が好意に思ってくれるような要素がない。

今まで、女の子と話すことだってまれであった私に、女の子が考えていることなんてわかるはずもない、が……。

ああ、そうか。だから、言葉にできないのか。

すごく、怖い。不安でたまらない。

伝えたいけれど、伝えてしまったらどうなってしまふのか、怖い。

ああ。私はどうしたらいいんだ。

ふと、この日記に、『追憶のしおり』が最初のページにはさんであるのを見つけた。これは、あるときカトリにあげたしおり。

ということは、カトリは私の日記を読んでいたってことになる。

確かに、いろんな本の中にあえて隠さず一緒にまとめておいたの

だが、日記、見られていたんだ。いつから、見られていたんだろう。それにしても、日記にしおりを挟んでおくんて。見ましたって、言ってるみたいだな。

ふと、しおりのはさんであったページの隅に、何か書かれているのをみつけた。

『先生、日記を読んでしまつてごめんなさい。日記、私のことばかりで恥かしいです。でも、いつも私に優しくしてくれてありがとうございます。私、先生といつも一緒に居られて、先生がたくさんたくさん優しくしてくれて。私幸せです。ずっとずっと、先生と一緒にいたいんです。私、先生のこと好きです。大好きです。カトリーヌ・ケイロン』

小さく、かわいい丸い字で、そうあった。

カトリの声が、聞こえたような気がした。

「……なあ、カトリ。一つ思うことがあるのだが」

「？」

「うちで、一緒に住まないか？ カトリは一人で住んでいるのだから？」

「……一緒に、住む？」

サンドイツチを右手にかわいく持って私の方をじつと見つめてきた。

「まあ……。その、なんだ。この家でさ、私と一緒に生活していくんだ。毎日、私がご飯を作ってもいい。カトリがゆっくり休める部屋もある。でも、それ以上に……。ああ、上手い言葉が出てこない。まあ、その、なんだ……」

またしどろもどろだ。自分で言ってしまったことに恥ずかしさを憶えて、もうどうしたら良いか頭の中が混乱する。顔が火照ってる

のを感じる。耳まで赤くなっているだろう。

カトリは笑顔になって、こくこくと、いつものように頷いた。

「えっ？」

「……先生の家に住む」

「えっ。い、いいのか？」

こくこく。笑顔のまま、頷いた。

「カトリはほんとかわいい女の子で……。私は男、だぞ？ 同じ家にいたら襲われるとか、思ったりしないのか？」

くすつと笑って、私の方を見る。

「……大丈夫」

「えっ？」

「……セイフティウォール」

「あはは。そうだな。そうだ」

「……でも」

すこし、真面目そうな瞳で私を見つめる。

「先生なら、いい。襲われても。私、先生に……」

じつと緑色の瞳で私を見つめて。カトリの頬が赤くなっていた。心臓が飛び出しそうなくらいどきりとした。

「……こら、カトリ。言って良いことと悪いことがあるぞ」

でも、カトリがそんなことを言ってくれるなんて。

本当に……。

「……。でも、先生なのに」

「え？」

「先生なのに、私を誘って。学校のこととか。大丈夫？」

「カトリ……」

そうか。この歳でこんなレベルの高いウィザードの彼女のことだ。今まで、きつと、私の立場とか慮っていてくれたんだ。

本当、聡明な女の子なんだな……。

「カトリは、みんなわかつているのかな。私の気持ち」
ふるふる。

頭を横に振る。

「……わからないけど、私の気持ちはわかるよ」

「カトリの、気持ち？」

「先生のそばに居たい」

「カトリ……」

「……だから、一緒に住む」

告白

それから、少し奇妙な生活が始まった。

私の元の寝室をカトリが使うようにして、私は書斎……、まあ、倉庫みたいなところだが、に寝るようになって。

朝は、結構早くから、カトリの「……おなかすいた」という言葉で起きるようになって。

学校に一緒に行き、一緒に帰ってくる。

カトリ専用の寮みたいになっているな。

ただ、休みの日には、露店街に出かけ、カトリと一緒に買い物したり、いろんなことを話して。

かわいいリボンをつけたカトリとゲフェンの西にある展望台とか、東にある海岸とか、見に行ったりも、した。

……なにもなかったぞ。本当に！ ああ、でも、これからなにかあるかも……ってカトリが見るかもしれない日記に何を書いているんだ。

心配していた学校のことは、カトリの身の回りのことから、私が養子として迎えたというような形になって、特別なお咎めもなしだった。

クラスみんなには、カトリと結婚したのだというようなうわさにもなってしまったが。

私のそばに、いつもカトリという女の子が居てくれるということが、私は本当に幸せだった。

ほんとかわいくて、スタイルも良くて。そんな女の子といつも同じ屋根の下で一緒にいるのだから、理性が保てるかが私の今の心配ごとになってしまっているが。

そんな、カトリがそばに居てくれるということが、日常に溶け込

んできたある日のことだった。

その日の朝。

いつものように朝食をせがみに来るカトリの声が無かった。

「カトリ？ まだ寝ているのか？ もう朝ごはんできたぞ」

お玉を持ったままカトリの寢室をノックした。しかし、返事が無かった。

「カトリ？」

「……せんせい」

扉の向こうから、消え入りそうな声で、答えた。

「入るぞ？」

扉を開け、ベッドに寝ているカトリのそばに行く。

「どうしたんだ？」

「……先生。体が……」

顔は赤くて苦しそうな表情で、はあはあと息をかけて、額に汗を滲ませて、私にそう答えた。

カトリの額をそつと掌で触る。

熱い。

「カトリ、すごい熱が。大丈夫か？」

こくこく。

思いつきり大丈夫に見えない。

風邪でもひいたのか？

「ちよつと待つてろ。薬とか、氷とか用意してくる。寒くはないか？」

「……ちよつと、寒い」

「わかった。他におかしいところがあったら、言うんだぞこくこく。」

カトリの体に、無理がかかったのだろうか。昨日まで、いつも変わらず元気だったのに。

でも、薬を飲んでも、一日二日経っても、カトリの様態は良くな
らなかった。

あんなにたくさん食べていた食事もほとんど取らず、クリーム
スープとか、お粥くらいしか食べてくれなかった。

私は心配で、講義にも行かず、ずっとカトリのそばに居た。

病院に、連れて行ったほうがいいのだろうか。

「……せんせい。私は大丈夫だから」

私を見て、辛そうな表情から無理に笑顔を作ってそんなことを言
う。

代われるものなら、代わってやりたい。

胸が締め付けられる。

「馬鹿。私に頼れと言っただろう。カトリの為なら、私は何でも出
来るぞ。かわいい女の子なんだから、甘えるんだ」

カトリの額に滲む汗を拭いてあげながら。

「でも、私、先生に迷惑をかけたくない……」

差し出した私の右手を両手でぎゅっと握り、今にも泣き出しそう
な瞳で私を見つめる。

カトリ……。

カトリも、私と、気持ち、同じだったのか。

そういえば、私は、カトリに私の気持ちを打ち明けたことが無か
った。

大切にしたい。

優しくしてあげたい。

幸せを感じさせてあげたい。

だから、そばにいて欲しい。

彼女の姿を見るたび。私の心の中が暖かく、穏やかな気持ちに包

まれる。

好きになるという気持ち。

私は、この女の子、『カトリーヌ・ケイロン』のことを、本当に、愛している。心の底から、彼女のことを。

それは、ずっと想っていた。

言葉にするのが怖かった。

でも、カトリも同じなら。

「カトリ。私は、君が好きだ」

「えっ……？」

「私は、カトリーヌ・ケイロンという女の子のことを、心の底から愛している。愛しくて恋しくて、たまらない気持ちになる。大切にしたいくて、優しくしてあげたくて。幸せを感じて欲しいと思う。だから、こんなことで私は迷惑だと思ったりしないし、気持ちは変わらない。安心して良いぞ。私はいつもカトリのそばに居る。カトリが嫌だつて言うまでな。約束する」

「先生……」

「だからな、早く元気になって、私の愛する女の子のかわいい笑顔、見せてくれな。おいしいご飯もたくさん用意しておくからな」

「ぐすっ……。うん」

嬉しそうに、私の手をぎゅっと握って。甘えるように私の手を頬に引き寄せた。

そのうち、すーすーとカトリの寝息が聞こえてきた。

次の朝には、いつもの、「……おなかすいた」という声で、私も目を覚ますようになっていた。

幸せの煌き（前書き）

この話のみ、演出上の関係で年齢制限に引っかかるであろうと思う部分になりますので、ご注意ください。

また、ちょっと過激すぎるうと思われましてら作者まで報告等お願い致します。

幸せの煌き

カトリが元気になってから、また少し過ぎていった。

夕食を食べて、いつものように、お茶を飲みながら、私の部屋で私のベッドにもなる大きなソファ―に座り、二人で本を読んでいたとき。

右隣に座っていたカトリが私の肩にもたれかかるように頭を預けてきた。

甘くて、優しい香りが私を包み込む。

「カトリ？」

「先生……」

優しい声で、私を呼ぶ。

私は右腕を回して、そっとカトリの右肩を抱きよせた。

こんなにそばに、私の好きな女の子がいてくれる。世界で一番大切にしたいと思う女の子。

そんな女の子の確かな温もり。

愛しさが募っていく……。

右腕を肩から抜いて、左手でカトリの右肩を引き寄せて。カトリをこちらに向かせた。

私を見つめてくる緑色の瞳。潤んで、キラキラと輝いて。その中には私の姿が映っている。

私を見つめてくれている。私に全てを任せているような、そんな優しい瞳。

ゆつくりと、その綺麗な瞳が閉じていく。

私も瞳を閉じて、そっとカトリの唇を私の唇で、塞いだ。

柔らかい……。

心臓の鼓動がすごく大きくなって、自分でも良くわからなくなっ

ていく。

今、私の愛している女の子と、抱きしめあっている。
体が火照って、顔が赤くなっているだろう。

この女の子のことが、たまらなく愛しい。

本当は、前から思っていた。

カトリを抱きたいと。

でも、そんなことは、私の男としての本能がそうさせているだけで、それだけのために、私の大切な女の子のことを傷つけたりしなくなかった。

でも。

今は違う。

カトリに、私を感じて欲しいと想う。

カトリの心の中でも、私をそばに居させて欲しいと想う。

彼女に、私を感じて欲しいと想う。

私の、そうした彼女に想う気持ち……愛していると言う気持ちを
知って欲しい。

そして、彼女を愛したい。

優しく、優しく抱きしめる。

肩にまわしていた右手をカトリの髪を梳かすように撫で。
左手で折れそうなほど細い腰を抱き寄せる。

塞いだ唇の間に、そつと舌を差し出してみる。

小さな暖かく柔らかい感触が、私の舌に絡みつく。

奥へ。奥へ。

互いに送り合い、誘って。

長い間、カトリと触れ合っていた。

カトリの手も、私の背中を這って。ぎゅっと力を込めて、私の温
もりも感じてくれているみたいだった。

やがて、唇が離れる。細い銀色の線が名残を惜しむように繋いでいた。

「カトリ。君を貰って、いいか？」

こくんと、大きく一度だけ、頷いた。

そっと、カトリの体に手を伸ばしていく。

カトリの体を掌で感じていく。

愛しい女の子が、ここにいます。

ウィザードの服は胸を強調して見せるような意匠になっている。

それはカトリが着るために作られたのじゃないかと思うほど、とても似合っていた。

その服を、いいのだろうか。

何も言わないのに、カトリはこくんと頷いた。

上のボタンからはずしていく。

でも、手が震えて。思うように上手く行かない。

それがまた、焦りを誘って。

「先生……」

カトリは私の手を押さえて、自分でボタンをはずしていった。

カトリの白い肌が露になっていく……。

鼓動が大きくなって。

自分の鼓動が耳の中で聞こえる。

初めて見る女の子の生まれのままの姿。

その女の子が、私の愛するカトリの。

ぱさり、と服が落ちる音。

俯いて、私の前に立つカトリ。

大きな胸、くびれた腰。細長い手足。透き通るような白い肌。一片の陰りさえない。完全な美しさとはこのことを言うのだろうか。

私も着ている服を脱いで。カトリを引き寄せた。

立ったまま、優しく、優しく抱きしめる。

とても柔らかく、暖かい、安心するような心地よさが私を包み込んだ。

とくん、とくん、とくん……。

カトリの鼓動を感じる。

カトリも、私と同じなんだ。

緊張して、怖くて。

でも、好きな人に愛されたくて、愛したくて。

抱きしめたまま、唇を合わせた。

左手で、カトリの腰を抱きしめて、右手で胸をそっと包むように優しく撫でた。

唇が離れ、かすかな甘い声を出して、私に体を預けてきた。ソファに崩れた私にカトリは座るように抱きついてくる。

カトリは私を食べるように首、肩、腕。いろんなところを甘噛みして、時々噛んだところをぺろと舌で舐めあげてきた。

カトリに食べられているようだ。くすぐりたいけど、すごく嬉しい。

私もカトリを食べるように首、鎖骨、胸、いろんなところを唇ではさみ、舐め上げた。

互いに、互いを慈しみ。感じようとして。感じて欲しくて。

手は背中から、腰、おなかから、胸、首……。

時々、唇を合わせて。舌を送り合い。

再び、互いに体を甘噛みして、舐め上げて。

夢中だった。

頭の中はカトリのことで一杯で。

私の心臓の鼓動も、壊れてしまっんじゃないかって思っほどドキドキしていて。

頭がくらくらしてくる。

どのくらいそうしあっていたのだろう。

時間なんて忘れてしまった。

「先生……」

座っている私の上にまたいで、カトリの熱くなったところに私のものを導いた。

私の先端がカトリの隙間に密着している。

「いいのか？」

「……うん」

ゆっくりと腰を沈めていく。

私のものがカトリの中へと消えてゆく。

「……いつ」

半分くらいまで入ったところで、ぴくりとして腰が止まる。

とても痛そうな表情で、耐えている。

「カトリ、無理は……」

「……」

震えながら、少しずつ、少しずつ腰を下ろしてゆく。

カトリからは暖かく、優しく、力強く、柔らかく、心地よい快楽を与えてくれた。

ぶちぶちと何かを裂いていくような感覚がした。

やがて、カトリの腰と私の腰が密着する。

私の背中に手を回し、ぎゅっとしがみついていた。しがみついた腕が震えていた。

「はあ……すう……。はあ……」

「大丈夫、か？」

「……私、先生を食べちゃった」

「ああ。私もカトリを感じる。私を受け入れてくれてる。すごく、幸せだ」

暖かく私を締め付けてきて。

カトリの体温を感じて。

私も、ぎゅっとカトリを抱きしめた。

心も、身体も、一つになったような感覚。

カトリの小さな唇を塞ぐ。

「んっ……」

小さな舌を私の舌で掬い、撫でる。カトリも私に答えてくれて。

「はむっ……」

背中にまわされたカトリの手が、私の背中を這っている。

背中から腰へ。腰から背中に。

まるで私がここにいてるってことを確かめるように。

そのまま、軽いカトリの体をソファに倒し、覆いかぶさるように優しく抱きしめた。

暖かく、柔らかい。しかし、折れてしまいそうなほど華奢で。

でも、大丈夫だよって言うように、私の背中に回した手をぎゅっと引き寄せ、しがみつく。

私はカトリの腰と密着したまま、カトリに包まれていた。

正直、動いてしまったら、とたんに終わってしまいそうだ。

彼女とつながっている時間を、もつともつと長い間感じていたい。私はそのまま……。カトリの暖かさ、香り……。柔らかな感覚を感じていた。

「はぁ……、すう……、はぁ……」

耳元にかかるカトリの吐息。私もカトリの息に合わせて。呼吸を深くしていく。

カトリの身体が熱くなっていく。抱きしめてる私の身体も、熱く感じる。

「す——は——……」

カトリの息が長く、深くなっていく。

体が熱い。でも、不快な熱さじゃない。

とくん。とくん。とくん……。

カトリの体の鼓動を感じる。私の鼓動も、カトリと同じリズムで刻む。

頭が、ぼーっとしていく……。

何も考えられなくなつて。

カトリと私との深い呼吸と心臓の鼓動だけを感じていく——。
一体感。

カトリと、息遣い、鼓動……。心も、体も、全て一つになっているように。

カトリとつながっているあたりが、呼吸するたび、痺れる感じがして。

そのたび、びくりとして、カトリが震える。

なんて、幸せで、心地よいのだろう。

気がついたら、私も、カトリも体に汗がびっしょりだった。

「……せんせい」

瞳を薄く開け、とろんとした表情で私を見つめてきた。

「カトリ、大丈夫か？」

「……うん」

どのくらい、つながったまま、じつとしていたのだろう。

とても長い間のようで、一瞬だったようで。

カトリは時折私をぺろと舐めて、唇ではさんでくる。

私もカトリの白い肌へ同じように味わった。柔らかく、甘い香りに包まれて。

この、大好きな、心から愛している女の子とずっとずっと一緒にその女の子と、一つになっている感覚……。

あたまがぼーっとして。

体が熱くて。

とろけるような幸せというのだろうか。

ぎゅーっと抱きしめて。抱き返されて。

何度も、何度も。

すごい。

すごい、幸せを感じる。

やがて、腰に痺れるような感覚が上ってくるのを自覚した。

ずっとずっと我慢してきたけれど、もう、限界が見えてきた。

「カトリ、まずい、出してしまう……」

「嫌。離れないで……ずっと一緒にいて」

離れようとした私をぎゅっと抱きよせる。足を私の腰に絡ませてきて。

このまま、カトリの中で……、いいのだろうか。

「……いい。先生の、欲しい。このままで……」

カトリは眉間にしわをよせて、何かを耐えているような表情。一抹の不安もあったけど。そんなことは、愛しあっている二人には。

私も、カトリのように、こくりと頷いて、ぎゅっとカトリを抱きしめた。

腰が甘く痺れて。

カトリに、『愛している』とつぶやいて。

私の想いを、カトリに。

「うつつ、くうつ……」

「くうつうつ……」

カトリの体が、びくびく震えて。私を受け止めていく――。

快感とか、心地良いとか、そういうものじゃなかった。

例えばように無い、幸福感。

愛している女の子が、私の全てを受け入れてくれて、私を感じてくれていて。

私の全てのものが、カトリへの想いが、カトリへと流れ込んでいく。カトリの中へと溶けていく。

長い、長い間。

「せんせいが、私にしみこんで、くる……」

私の鼓動に合わせて震えて、強くしがみついてくる。

私も、ぎゅっと、愛しい、愛しい女の子を抱きしめていた。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

ずっとずっとそのまま抱き合っていた。

腰が、立たない。心地よい虚脱感。

私の全てで、カトリを愛せたという満足感でいっぱいだった。

幸せだと、本当に思える。

「……先生。私を、感じてくれた？」

気がつくと、カトリは頬を紅潮させて。瞳を半分くらい開けて。私を見つめていた。

ああ。本当。この女の子のことが、たまらなく愛しい。

「そうだな。カトリ。私もカトリの想い、すごく伝わってきた。ありがとう。私は幸せだ。カトリのこと、心から愛している……」

「……うん」

ぎゅっとカトリの頭を抱きしめる。

「ああ、そうだ。やることがある」

「？」

「結婚、しないと」

「……うん」

とびきりのかわいい笑顔で。私の唇を塞いだ。

9月になって

9月6日

日付を忘れずに入れておかないと。しばらく日記をさぼっていたから自分を戒めるためにもな。

カトリは、あれからしばらくして学校を辞めて、常に私の家に居るようにしてくれた。

料理とか家事も少ししてくれるようになって、私が学校の講義が終わったらカトリの作ってくれた料理を二人で食べるようになったりするようになった。

買い物に行ったら手を繋いで。綺麗なところで抱き合ったり。：

…外で変なこととはしてないぞ！

カトリとの関係を他人に訊かれたら、「私の妻です」と答え、それを聞いていた恥ずかしそうにするカトリを見るのも幸せだった。

つまり、色々あったが生活は順調ということだな。

ただ、一つ不安になることがある。

時折、前のようにカトリが熱を出し、寝込むことがあることだ。長引くことはなく、一日二日で元気になるのだが、突然朝に熱を出しているので心配になる。

何か大きな病気の前触れなどではないだろうか。今度ちゃんと、医者に診てもらうことにしよう。

私の、かけがえの無い大切な女の子だからな。

9月10日

最近、おかしい事象が世間の話題となっていた。

世界の魔物が少し弱くなっただけらしい。

魔物とは、簡単に説明すると、このミッドガルド全域に生息する人間や動物とはまったく違った種族のことで、その形は様々で、魔力を源として生き、人間と敵対する生物のことだ。魔物と人間が戦っている世界なのだ。終わりもなく……。

というか、自分の日記に何をわかりきったことを書いているのだ。まあいいか。

それでその魔物が弱くなった——今まで太刀打ちできなかった魔物を討伐できるようになったとか、魔物が時折逃げることもあるのか。

そのことについて、私に再三の質問が来るようになった。魔法学校のほかの先生やら、生徒やら、私の噂を聞きつけた名も知らぬ冒険者達。

しかし、そんなこと、私にわかるはずもなく。とりあえず磁場の関係で魔力が弱くなって来たからではないかとか、安息日と言うものがあるからとか適当に答えたりしたのだが、半分あてずっぽうなので、隣で心配そうな瞳で見るカトリに苦笑いするしかなかった。

魔物の研究、また始めてみることにしようか。

この研究についてカトリが知ったらどう思うのだろう。
今度相談してみよう。

9月15日

また、私の研究のことを少し書いておくことにする。

まず、私が興味を持ったのが魔物の生態系だ。

大抵の魔物は、昆虫や動物型であったり、物の形であったり、人間の死体から魔物になるケースもある。霊といった実態を持たない魔物もいる。そういった魔物は基本的に種族という分類はしていても、生態系は不明だ。

だが、人間ほどの知識を持った魔物はいる。悪魔種族とか天使種族に見られる。

また、オークとかゴブリンと言った種族は文化があり、人間に似たコミュニケーションを形成している例はあるが、稀である。

それらの魔物は突然現れて、襲ってくるものもあり、倒したら、消える。減りもしないから絶滅することも無い。

つまり、どのようにして生まれ、生き、死んでいくのかわからないのだ。

だから、延々と1000年以上も魔物と戦ってきた歴史があるのだ。

一般の見解では、魔物とは、魔力によって生まれ、魔力によって生きている。そんな生物らしい。

人間のように、互いに異性を愛し、子を作り、育てていくといったような事はしないのだ。

では、その魔力の源とはなんであろうかと疑問に思った。

それを知り、説明することで、人間の可能性への道が開かれるような気がしたのだ。

私は、あるとき、ある一つの可能性に言及された本を見つけた。

それは、人間としての尊厳を無視する、倫理に反した事が書かれ

ていた。

でも、私ならば、違う方向にこの可能性を利用できるのではないだろうか。

こうして、研究を始めたのだ。

こんなことをカトリに話してみたが、私が研究を始めることは喜んでくれたみたいだ。

愛する人から了承をもらった。少しずつだが、また始めてみることにした。

使わなかった魔法

10月10日

また、カトリが熱を出した。

なんだか、熱を出す期間が短くなっているような気がする。

先日病院で医者に診てもらったが、過労が原因の風邪だろうといったような診断しか貰えなかった。

心配だ。

カトリに言わせたら、「……すぐ治るから心配しないで」と辛そうな表情で私を見るだけだ。

やはり、調べた方が良いのか。

私の家には本だけではなく、生物の研究に使う道具もある。

それからカトリの髪を少し頂いて、いろんなことを調べてみた。
成分、DNA、血液型、その他……。

大きな病気の前触れには、体のどこかに異変が起きているはずだ。
それを知れば、病気も治せる方法が見つかるはず。

そして、わかったことに、私は酷く驚いた。背筋に悪寒が走り、
鳥肌が立つてくる。

まさか。

まさか、そんなことが。

でも、今、答えが、それを物語っていた。
何度もやり直してみた。

間違いなかった。
間違いじゃなかった……。

そんなこと、あるはずはない。いや、あつてはならないのだ。この世界では。

でも。

カトリの出生、今までの生活……。符合することが多すぎる。

病気とは全く違ったことで、カトリについて、判ったことが出来た。

カトリは……。いや、でも、そんなことあるはず無い。

ふと、私の脳裏に、ある出来事がよぎった。

カトリに魔法を見せてくれと言ったときのことだ。

あのとき……。

通常、魔法使いが使う攻撃にもなる防御の、あの魔法を使わず、あえて『ジェムストーン』を使う『セイフティウォール』を使っていた。セイフティウォールはマジシャンやウィザードはあまり使わない。守りと癒しの法術を使うプリーストが主に使う魔法だ。

それにあの魔法を使える場所もあつたはずだ。私も魔術師だったら最初にあの魔法を使う。カトリが知らないはずはない。

使わなかったのは、やはり“使えなかった”からなんだ。
きつとそれは、私がいたから。

あの魔法は、カトリが使うと、私にも効いてしまうから。

このことは、日記には書かないでおこうかと思ったが、書き記し

ておくことにした――。

「魔法使いは、武器を使わない。体力が無いからあまり重い武器を振り回したり出来ないからだな。また、その為、防具も重いものは装備できない。しかし、魔法には詠唱がある。では、魔物が襲ってきたとき、魔法使いはどのようにして詠唱をする時間を稼げば良いか？」

「ファイヤーウォールなどを使って、足止めします！」

「そうだ。さすがにゲフェンのウィザード志望生だ。その通り」

『ファイヤーウォール』

炎の壁を出し、魔物を足止めできる魔法。

魔法は精神力を触媒にするので、その効果の対象を決められる。単体に攻撃したりするのであれば、そのみを対象にすればいいのだが、こうした範囲魔法や設置魔法と呼ばれる魔法の中で対象が複数に渡る、味方にも影響の出てしまいそうな魔法は少し違う。

基本、人間が出した魔法に、人間は影響を受けない。

例を挙げると、人間が出したファイヤーウォールは人が通っても熱くもないし、普通にすり抜けられる。

でも、魔物にはしっかりと効く。本物の炎と同じように効く。

魔物の方もそうだ。魔物が出した魔法は、何事も無かったようにすり抜けてくる。

すなわち、魔法は、人間と魔物に、自動的に区別されているのだ。多分、そのため、人間と魔物が戦う世界になっているのだ。この世界では。

それなのに、何故、あのときカトリはファイヤーウォールを使わなかったのか。

私とカトリの間にファイヤーウォールを出し、私をくぐらせれば、魔物であるライドワードだけをはじくことが出来たのに。

あえて、対象を選ぶセイフティウォールを使っていた。

確かに、そのほうが安全かも知れない。私が転んだりしてファイヤーウォールの向こう側に行けなかったら、もっと危なくなる。

そうであって欲しい。

たとえ、そうでなくても。

カトリは、カトリだ。

私の愛する女性。

私の世界で一番大切にしたい女性。

私の、妻だ。

そして、これから

10月11日

頭の中が混乱していたときに、私宛に一通の手紙が届いた。

以前、ジュノーで暮らしていたときに知り合った男からのものだった。

その中身は、最近の魔物の弱くなってきた理由と、リヒタルゼンでの生物研究所の動向が怪しいということが綴られていた。

魔物の弱くなってきた理由。

そうか。

だから、カトリは熱を出したりすることがあったんだ。

そして、その手紙には……。

「……私、先生に言わなかったことがあって」

「言わなかったこと？」

「私……魔法学校に入ろうと思ったのは、先生が教えてくれるってことを知ったから」

「私に？」

「……私。昔、ジュノーに居た」

「カトリの、昔話か」

こくこくと頷き、再び話しかけてくる。

「そこで……。先生と会ったことある」

「えっ？ 私と？」

こくこく。

確かに、私はゲフエンの前にはジュノーにいた。生まれはアインベフに近い街のはずれだったが。

「そのとき……。私に色々教えてくれた。魔法のこと。世界のこと」記憶を思い起こしてみる。

そういえば、昔、ノービスの女の子に、どうしたらいいかと聞かれて……。その女の子には魔法が良いと思って、魔法のことを教えたような、おぼろげな記憶がある。

私もまだ、自身でも幼かった所為もあって、姿さえ覚えていないが、その女の子が、カトリだったのか。

「……そのうち、本で先生の名前を見るようになって。そして、ゲフエンで、先生の姿を見つけたの」

カトリ。

「私はずっと、先生を探してた。だから、もうどこにも行かないで行くのだったら、私も行く」

カトリの答えは、こうだった。

11月5日

カトリは、人間ではなかった。

人とは違うDNAをもち、血液型、そのほか一切不明。

それは、すべて、カトリが魔物であることを示していた。

人型の魔物は数多くいる。オークとかゴブリンとか有名だ。不思議

議なことではない。

だが、カトリは普通の女の子だ。ただちょっと無口でたくさん食べる事が出来るという。

怪我をすれば血も流すし、喜び、怒り、哀しみ、楽しむ。
彼女と私とどう違うというのだ。

なにより、私は、カトリに恋をしている。愛している。
たまらなく愛しいと思う。大切にしたいと思う。ずっとそばにいて欲しいと思う。

その何がおかしいというんだ。

だが、このことを他の研究者が知ったらどうなる？
ここミッドガルドは魔物と人間が戦う世界だ。

私の研究は、こんなことをするために始めたんじゃない。

でも、この研究こそが、彼女と、私を繋げる唯一の未来なのだ。
その為には、私は何だってやろう。

この道は茨の道だ。とてもたくさんの困難が待っているだろう。
だが。

あの娘の笑顔を。

私の愛している女の子のそばにいられる幸せを。

それがこれからずっと送れるだろう。

そう、ずっとカトリはいてくれる。

彼女がいてくれる限り、私はどんなことでもできるだろう……。――

この日記はここで途切れている。

日記を書いた研究者の行方は依然としてつかめていない。

彼の研究していた不老不死の技法は永遠の命題になるだろう。

そして、この中で出てきた少女は、今……。

T o b e c o n t i

n u e d . . .

あとがきと次回予告

——あとがき——

最後までこの作品を読んでいただきまして、ありがとうございます。作中の最後にあとがきとして書き残すことをご容赦ください。

『ラグナロクオンライン』という作品を知らない方へ。

この作品は、『ラグナロクオンライン』という『オンラインゲーム』の中で、生体研究所という場所があり、そこに出てくるプレイヤーと同じ姿の敵キャラクターを元にした二次創作小説です。ファンフィクション

私は、このゲームは1年以上前に止めてしまったのですが、このゲームをしていて、出逢った方々、思い残したこと、そして、そのとき楽しかったという想いのもと、この話を書いてみようと思った次第であります。宿題を遣り残したという気分でも申しましようか。生体研究所という場所に出てくる名前のあるキャラクターは全部で12人。細かな公式設定などはほとんどなく、いろんな場所でのいろんな方々が生み出したイメージから想像して参考にして、今回のお話が出来ました。その為、キャラクターの性格等は私のオリジナルではありません。

この話は、これから予定している全6話のうちのプロローグに相当するというようなお話です。

いつになるかわかりませんが、これから次の作品を完成させて行きたいと思います。

その節はどうぞ読んでみてくださいまし。

また、このラグナロクオンラインという作品に興味を持たれた方、どうぞ調べてやってくださいまし。きっと、このお話が面白く思えると思います。

ラグナロクオンラインという作品を知っている方へ。
楽しんでいただけましたら、幸せです。またよろしければ次作も読んでいただければ、幸せです。

最後までお付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。

——次回予告——

ジュノー。

ここで過去に縛られた女の子がいた。

いつもそこから逃げようとするたび、心を、身体を傷つけて。
助けを求めることも出来なくて。また深く傷つけていく。

そんなとき。

彼女は一人のアコライトの男の子と出会う。

彼と出逢ったことは、彼女には幸せなことだったのだろうか。それとも……。

ラグナロクオンライン二次創作小説

生体研究所編

第2話

『錬金術師の夢』（アルマイア＝デューンゼ イレンド＝エベシ）

近日公開予定！ ただ今執筆中！

——以下製作予定——

第3話『空に知られぬ雪（仮）』（エレメス マーガレッタ）

第4話『おさななじみ。（仮）』（ラウレル トリス カヴァク）

第5話『歌姫（仮）』（ハワード セシル）

最終話『永久の絆（仮）』（セイレン セニア）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4362f/>

ある研究者の日記

2010年10月8日15時49分発行